

浜松中納言物語卷五末尾攷

中西健治

はじめに

浜松中納言物語卷五末尾は唐土からの多数の来訪者があることを記した後、以前遣日使であった宰相が中納言に手渡しした一通の消息文を掲げ、それを読み終えた中納言が深い感慨を抱くという場面をもって閉じている。かつて藤田徳太郎氏や柿本煥氏はこの後に若干の欠巻が予想されるとの説を示されたことがあるが、現在の研究では巻五を末尾とするのが共通理解となっているようである。藤田、柿本両氏説に対しての反証は種々考え得るが、浜松研究の第一人者、松尾聡氏の発見にかかる尾上本末巻末尾が物語の大尾にふさわしかるべきことを慎重に説かれ、かつ柿本氏が反論の対象とされた論文「浜松中納言物語末巻略考」^⑤はこの問題の、いわば原点に相当し、現在でもなお首肯すべき点が多く、筆者もこれに従うものである。松尾氏は巻五で物語が完了し、さらに末尾に落丁も予想されないことについて幾つかの点を指摘し、その

一つとして「第五巻の終りに、中納言の帰国後、語られなかった唐の後日譚を足早にまとめ、解決してゐること。」を根拠とされている。素材として転生や夢、異郷を持ち込んだ物語にふさわしい後日譚であり、物語終焉の光景でもあるだろう。物語の設定による手法のもたらした効果ではあろうが、何よりもその核に後日譚自体のもつ重みが据わっているのではないかと考える。本稿の課題はその後日譚の重みの実体と「足早なる解決」の設定方法を物語本文に即して説明することであり、松尾氏が既に説かれようとして詳述を避けられたことを再度敷衍することにもなろうし、また同時に藤田、柿本両氏説への反証ともなり得るはずである。いま論述の都合で順序を変え、(一)宰相の消息 (二)中納言の感慨 (三)唐土における事件、の三章を設けて該箇箇所本文を引用すれば次のとおりである。

(一) 「去りぬる年の三月十六日にかうやうけんの后ひかりかくれさせ給にしかば、てんげんになしみて、御門位を捨て、御ぐしおろして崑崙山に入給にき。春宮位につき給ては、一の後世のまつりごとをし給。第三の親王、春宮にゐさせ給ぬ。一の大臣の第五のむすめ、うちにまいらせて后にたてんとする程に、

この世にもあらぬ人こそこひしけれ玉のかんざしなにくはせん
 髪をそぎ、衣を染て、ふかき山に入りぬ」
 とあるを見るに、(二) 「見し夢は、かうにこそ」とおぼし合はするにも、いとゞかきくらし、たましひ消ゆる心ちして、涙にうきしづみ給けり。
 (四三九・四四〇頁)

一 宰相の消息

宰相なる人物は中納言の在唐中、中納言の側を離れず一切の世話をした人物であり、日本のことにも精通し和歌なども詠んだりする人物として設定されている。この宰相が三年ぶりに再び日本にやって来て中納言に手紙を託したのである。これを本文では「送りにきたりしさい将のもとより、消息あり。」としていることから、一般的に手紙を表わす「ふみ」を用いないで「消息」を用いていることが注目されよう。平安時代の諸作品について「ふみ」と「消息」の比較をされた小松茂美氏によると、前者が私的性格

が強いのに対して後者は形式の整った「ちよつと肩を張った手紙」とみられるという区分が示されていて、いかにも浜松における手紙を意味する用例も小松氏の説明に従えるものがあるからである。臆測するに宰相が中納言に宛てた消息は物語本文に示されたことだけではないはずで、おそらくは中納言への久闊を叙する言辭や自身の周囲についての挨拶もあつたらうと考えるのが、「消息」の語からは穩当であらう。作者はそれらを踏まえたうえで他に種々の報告事項があつた中でとくに「あはれにいみじき事」について、別途「日記」にして報告するかたちを設定したものと解せ、それ故に中納言に深い感動を覚えさせたものは他ならぬ日記の内容そのものであつたのである。それでは、そのような日記とは具体的にはいかなるものを想定すればいいのだろうか。日本古典文学大系頭注は「しみじみとひどく悲しいこと切ないことの数々を日記形式でしるして」とされている、その「日記形式」とはどのように理解すべきなのだろうか。

土佐日記や蜻蛉日記などのいわゆる日記文学と称される作品が生まれてくる前段階として「日記」という語のもつ事実の調査報告的性格に従って漢文日記や仮名日記があつたことなどについては従来の日記研究が教えるところである。本物語中に見える唯一の用例である「日記」も前段階的な意に従つて、中納言に報告すべき宰相の記録であつたとみることができるのであるが、ここに些かの説明を付加しておく必要があると思ふのである。

光源氏が須磨への流謫中、紫の上は京の二条邸で絵を「日記の

やうに書(明石・(一)・二五)⑤いて心を晴らしたとあるように、日記とは心を慰める日々の出来事の記録でもあった。宇津保物語には「俊蔭の朝臣唐に渡りける日より、父は日記し一つは琵琶和琴一つえりとり侍りける日まで、日付けしなど」(蔵開上・一〇五三)とか、俊蔭が自ら作った詩文や和歌について「その人の日記などなん、その中に侍りし」(同)とあるように、徒然を慰めるかのような日記もその内実は京を遠く離れたり渡唐するといった重大な事件が契機となつて密度の濃いものになつていくことがわかるのである。また一方で、仲忠が帝の前で俊蔭の多くの遺文を讀む条で帝は仲忠に「集ども、日記どもなどをなん読ませて聞くべき」(蔵開中・一〇九二)と思う箇所があることから、日記は齋詩文集と同様に朗誦できるような文体をもつていたことがわかる。これらのことから、宰相が中納言に宛てた日記も重大な事件を契機として記されたものであり、語句や文体の面からも漢文体を彷彿とさせることから、あるいは帝に披露される俊蔭日記の体裁に近かつたのではないかと思われるのである。漢文体を念頭に置いたものを和文文化させたかみえる表現を用いているものの、それでは和語和文にも通じている宰相からの手紙を設定した意味が無いし、またとくに漢文体日記を翻案したかとも推測することも無用であろう。むしろ注目すべきは唐土での極めて重大な事件を報告するに日記の形式を採つたという点である。ここで想起されるのが日記のもつ力について益田勝実氏の指摘されたことである。益田氏は、天喜四年四月二十三日、東大寺境内でおき

た検非違使乱入事件について、事件を目のあたりにした東大寺の五師たちの「日記」と都の左弁官に東大寺の僧綱が送つた漢文風の解文との文章の相違に注目され、この相違は事実に対する把握のし方によるものと解して、検非違使狼籍事件の記録として「事実をありのままに表現する強烈な必要が生じた」ためにあえて漢文体を捨て「万葉仮名と平かなを混用して」より和文文化された表現を採つたものであると述べられた。ことは事実を対象とした例であつて、虚構としての物語の用例に適用するには慎重でなければならぬが、「日記」という語の共通点を支えとしてこの説を浜松に導入するならば、唐土での宮中混乱は和文で記され報告されたことによつて事件の有する衝撃力の大きさが伝えられたのであり、さればこそ記録形式のものを見せたのであらうと解することはこの場の状況をより鮮明に浮かびあがらせる効果をもたらしたと説明できるのではあるまいか。

二 中納言の感慨

唐土からもたらされた日記は唐后の死とそれに伴う政情の変化や五の君のことであり、それに「見し夢」を思い合わせた中納言は深い感動に驚かれるのである。「見し夢は、かうにこそ」につき日本古典文学大系頭注は「自分(中納言)が見た(唐后の)夢は、こういうこと(唐后の死の知らせ)だったのだ。」とされている。事実、唐后の死は唐土からの日記で去る三月十六日であることが

判明し、夢と一致している。しかし、「かうにこそ」という張りつめた表現はたんに一回の日時、事実の符合から生じる一種の知的興奮によるものではなく、より深いところで物語の終焉に関わつていく「思し合は」せ方が意図されていることを反映してのことと考えられる。物語の終局には作者の作品形成と共に辿つた時間を終える溜意にも通う思想の凝縮があつて然るべきではないかと思うからである。

末尾における過去の夢と現実に生起した事実とを照応させる中納言の行為が感慨の原点であると解するならば、それを表現している「思し合はず」という語のもつ内実をこそ検証する必要があるのではないだろうか。平安朝の語としては珍しくもない語ではあるものの、浜松での用法は他の物語に比べ夢と現実とを照合する場合の例が多く、「思ひ合はず」六例中四例を加えると十例中七例が同趣というやや偏つた使用がなされており、このことは同様な例は見出せるが用例の絶対数が多いので目立たない源氏物語に比べるとやはり特異なこととみられるのである。それでも須磨に流謫することを夢告げによつて予言した「違ひ目」と藤壺懷妊とを照合して光源氏は「もしさるやうもや」(若紫・(一)一〇〇八)と怖えるところや、実の娘が誰かの養女になつていくとの夢を見、光源氏の特別の計らいで娘の装束の腰結役をすることによつて対面が実現し、「今ぞ、かの御夢も、まことに思しあはせける」(行幸・(三)一三二二)と内大臣に思わせるところなどをみると、「夢の描写のあとにその夢が必ずしも現実世界の人間の行動

を左右する動力とはなつてゐないことを装ふ作為を何等かの形に於て附加する用意を忘れない」という源氏物語作者の周到な手法は数段優つてはいるものの、根底には夢を物語展開の大きな要素としていることは通い合つているのであり、まして夢を主たる素材の一として現実と夢とを照応させ物語を展開する浜松においては「思し(ひ)合はず」という語は物語の基幹的手法に関わる重要な語であると考えねばならないだろう。

それでは当面の箇所は如何であるか。唐后の死は巻四で空中唱声として告げられ、中納言を「げにかの御身も千年の松かは」(三八〇)と悲嘆に眩れさせる。この日が宰相の日記にいう三月十六日であるから、これと中納言の夢とを照応させるのは当然であるが、巻五に至つて天に転生した唐后が吉野姫君腹に身を変えて宿つたことを中納言に夢告げするところがあることから、この方がむしろ「見し夢」に相当すると考えられる。雨宮隆雄氏が説かれるように、異郷の地であっても愛する心を堅持することにより再会するという「恩愛の何物にもまさる深きを語らう」とした物語であるからこそ、「唐后の『天』への転生はほとんど何らの意味も持たない」ものであると思われ、これを合わせ考えれば「かうにこそ」について、三月十六日の唐后の死を指示されている日本古典文学大系の頭注には補足が要するようになってこよう。その意味でこの箇所に「河陽東の崩御は事実だったのだ、吉野の姫君の腹に転生したとの夢も正夢では……」⑥と注を施された三角洋一氏の見解は従うべきで、将来の中納言との運命を期待せ

しめる一項を付加することによって物語の主題に即した終焉本文となり得ることを示された注として正鶴を射ているのである。

「おぼし合は」せられるのは日記の記事と「見し夢」であり、そのことはいわば彼岸の混乱と此岸の悲嘆とを意味しており、両者を同質の実体あるものとして捉えることを要求する叙述ではあるまいか。日本での感嘆は悲しみを超えて将来に光明を見出すべく唐后が転生して女人となりやがて誕生するはずで、唐土での政変もいずれば第三皇子の治世が到来することを明らかにしている。両者を照合させることによって時空を超えた深い思いがもたらされてくるのである。

なお少し付言しておく。この箇所は「いとゞかきくらし」「たましる消ゆ」「涙にうきしづみ」と、中納言の悲しみを最大限に表現する語句を重ねて巻を閉じている。このうち前二者の用法については物語作品での類例も散見されるが、「涙にうきしづみ」については浜松でこそ他に三例、都合四例の用例があるけれども、一般に物語表現の中では少ないもので、そもそも「浮き沈む」の語にしてからが宇津保物語、源氏物語、狭衣物語、松浦宮物語に各一例、寝覚物語、とりかへばや物語に各二例がある程度である。これに対して和歌には多く用いられ、宇津保や源氏、松浦宮の例も和歌での用法であった。このことから「涙にうきしづみ給けり」という結びの語句には、「いとゞかきくらし」「たましる消ゆる」とする誇張された類型的悲嘆表現を受けて、それに重ねて歌語的な表現で締め括ることにより、より叙情的な末尾文とす

三 唐土での事件

る意識の反映が内包されていると読みとれるのである。

宰相が日記として報告した唐土での事件は、(A) 河陽皇后の死、(B) 唐帝の出家、(C) 春宮の帝位即位、(D) 第三皇子の春宮即位、(E) 五の君の出家、の五項目であった。これらはすべて連鎖反動的に生じたことであり、その根幹は一に(A)の事件によっているというべきで、唐后の死去そのものは唐王朝を混乱の極致に陥れるに十分なほど衝撃的な出来事であったのである。「てんげんにかなしみ」と本文的には不審が残るが、おそらく松尾聡氏が一説として示されている「天下」で、天下万民が悲しむと共に帝も失望してしまったと読めるものと思われ、それほど唐后の死は重大な事件であった。そう解することによって、以下の四事件が一は現実の政治に関わっていく春宮と第三皇子の地位の変動を、他は位を捨て深山に籠る反世俗的な姿を、出家・即位・即位・出家という「上下に反転して相対する勁妙な対句的效果を生み出し得る」叙述法を用いて描かれていることが納得されるのである。

この日記報告者は宰相中将であった。彼は「かたち心ばへすぐれて何事もなだらかにたどたどしからず、この三年がほど、夜昼中納言の御あたり離れず」(二三八)とあるように、中納言が菊の咲く頃河陽県を訪れ後に心を奪われたときや、三月十六日の夜山陰を訪れて秘かに女性(唐后)と契った場面にも付き添っていた

はずの人物であり、その後、相手の女性のことにも悩み恋い続ける中納言の姿をもよく見知っていて、その女性が帰国間際になって唐后であると思いついた中納言の驚きをも知悉しているのがあった。その彼が中納言に報告すべき重要事項として最初に掲げたのが唐后の死去であった。「去りぬる年の三月十六日に」という書き出しは中納言を巻四の空中唱声事件に思い至らせるための過去の時日記述であると同時に、基本的には唐における宰相中将と中納言しか知り得ない唐后への特別な思いが込められていて、過去の秘やかな思いを中納言に甦らせる効果をもつものであろう。用語選択の面でも「去りぬる」という平安朝和文にはあまり用いられない語を冠して説き起こしていることも、たんなる臚化法的な表現としてではなく、むしろ日記文として改まった意識で表現しようとしている姿勢が窺える。

次に(B)以下の事件の叙述の問題点について考えてみたいが、まず(B)、(E)の現実には背く姿をどう描いているかを検討する。

帝位を捨て深山に入る動機は唐后の死去である。唐帝はまだ年も若く将来性もあった。それにもかかわらず帝位を捨てるのはよほどのことであったはずで、しかも剃髪のない崑崙山に赴くのである。「みかどの御ふるまひなど、日本のやうにうごきなくはあらざりければ」(一六三)とことさらに異国を印象づけるような記述をしていることから、日本での皆無に近い類例を考える必要はなく、むしろ異国という設定だからこそきわめて果敢な行動ができたこととみるのが穏当かと思われる。ただ、帝の唐突な剃髪で想起さ

れる花山天皇の出家騒動には考えを及ぼしておく必要がある。花山天皇は複雑な政治情勢による出家であったことは種々の史書や記録が明らかにするところであるが、栄花物語(花山たづぬる中納言)には退位の主たる動機を低子卒去に求めるべく、「王朝全史を通じても、他に類例のない珍しい、且つは重大な出来事」^⑧を、低子の入内、発病、卒去、帝の脱履と、いわば直線的に叙述すると、日本の歴史上、帝が剃髪するときの殆どが不子や讓位による場合であったことを考えると、異国という特殊な場面を考慮に入れるとしても、基本的には花山天皇の事件を把握し描写する栄花物語作者の発想と軌を一にするものがあつたとみていいであろう。

帝位を捨てる前兆はあるにはあつた。河陽皇后が蜀山に籠ったとき、都に出て来ればやがては第三皇子に讓位しようとして「たゞしおもひ念じて、皇子の御世を待ち給へ」(一八四)と後の父に訴えていた。しかしこれはすでに一の後を母とする春宮がいることから事実上は困難なことであり、しかも春宮の祖父こそは国政全般を牛耳っている一の大臣であった。そのような中で第三皇子への讓位を仄めかしたのは、春宮が帝位に即位した際に次代の皇位継承権をもつ人物として王権の中心圏内への導入を図ろうとしたためであろう。中納言の父の転生である第三皇子を王権の中心へ参入させるその背後に意表をついた帝の非現実的な反俗的行為があつたと解せるのである。世俗的榮譽と神仙秘境の地への隠棲との対照が鮮明であればあるほど、そこに浮かびあがってくる感

情は濃やかであり、帝の深刻な苦悩が伝えられるはずである。

反俗的行為にでるもう一人の人物は立后という女性としての榮譽に背を向けた五の君である。一の大臣の最愛の娘は一の后ではなく末娘の五の君であり、おそらく一の大臣側は権力をより強固なものにしようとして彼女を宮中に送り込み新帝の后にと目論んだにちがいない。しかしながら彼女は中納言恋しさの歌を詠んで「ふかき山」に入ってしまう。この尋常ならざる行為は無名草子評言の格好の批評対象となり、他の女性にまさる多くの評言が費されているのでもある。富倉徳次郎氏はこの五の君の行動について「女性心理を追求しようとはしないで、むしろ物語的な異国女性として結んだ」と述べておられるように、自己の感情を直截的に詠んだ歌をのこし、卒然出家してしまう。その歌の下句「玉のかんざし何にかはせん」の「玉のかんざし」は諸注釈書のいうように后位の象徴とみられるのであるが、加うるに中納言との最初の出合いの折、「玉の簪鮮かにて」(七六)とあるところから在俗中の自身の装飾具を指しているとも解せるのである。后位の象徴としての「玉の簪」と中納言との出会いに身を飾っていたそれを共に捨てることを意味するのではあるまいか。「かんざし」の用例は七例(他に「わけめかんざし」一例)であるが、「玉の簪」は五の君が登場する場面と出家直前の和歌との二例のみであり、少なくとも本物語についてはこの語を后位の象徴とだけ解することは適切ではないと思われるからである。もちろん、「玉の簪何にかはせん」は当時の慣用語としてあり、浜松においても「この

世の後の位も、身にはすべて益なう覚え侍。」(二五九)、「いみじからん後の位もなに、かはせん。」(三〇五)、「国王の位もなに、かはせん」(四〇八)などに見られるように、「玉の簪」が「なににかはせん」という峻拒の対象となるほどの光輝あるものとして捉えられていることから、それを后位を意味する語句と理解するのが当然であろうし、文の流れからみてもそれは穩当ではあろう。しかし、物語中「玉の簪」を身につけているのは五の君だけであり、中納言との初対面の場面も無名草子評言に物語本文が抜き出されているように印象的な箇所であったことから、在俗中の五の君の装身具と解することを全面的に退けるものではあり得ない。これらを考慮すると、五の君は「立后し玉の簪をさすようになっても、また、私の黒髪に飾られていた美しい簪も、恋しい中納言のいない今は何の役に立つのだろうか」と思うことになり、決然と自らの意志によって俗世間との交わりを拒んだのであった。

五の君は剃髪し衣を染めて深山に入った。ここという「ふかき山」とはどこか。物語中で「ふかき山」としているところは巻一では蜀山、巻三では吉野山であり、帝の入る崑崙山もそれに相当しよう。崑崙山に五の君が入ることは帝と同じ所であるので不適当であることから、かつて唐后の父が籠った蜀山かとも想像されるが、臆測の域を出るまい。叙述展開の面からみれば、一方では崑崙山という秘境として周く知られている固有名詞を記したのに対し他方では深山幽谷を仄めかすのみの対照法を採ったのかも知れない。

それでは(C)、(D)についてはどうだろうか。唐帝、五の君のように俗世間に訣別してゆく人物の行動とは対照的に、現実の政治に関与する人物は叙述の面できわめて簡潔に扱われ、帝の退位後に春宮が帝として即位し、第三皇子が春宮に即くという王権交代を淡々と記していることが注意されよう。とりわけ、新帝即位後母である一の后が政治の実権を握るということが何の修飾句もなくごく自然な行為であるかのように記されていることは一考を要しよう。もっとも一の后の父、一の大臣は性格も独善的であり、国政を我がものとしていたことが強張され、それは同時に一の后の地位や性格にも繋がることであって、「かの国の一の大臣のむすめ、春宮の御母の一の后、才さとり、世のまつり事かしこう、おぼえやんごとなかりしを、」(三一〇)とあるように、一の后はかねてから積極的な政治参加をしていたことが窺われるのである。帰朝後、中納言が式部卿宮に唐土の印象を語る場面で、一の后像は多少の誇張がされているだろうことを差し引いても、日本古典文学大系に「唐土では後も政治に参与したというつもりの記述か。」と注されるくらい奇矯なあり方を設定していたのである。このことについては中村真一郎氏も「中国女性の知的優越性」を描いているとして、「この作品の書かれた時代の日本の女性が、後宮に隔離されて暮らして政治的には全く無智であり、その代りに感覚的洗練の専門家になっていたのと極端な対照をなす事実の指摘である。」と述べられたのである。したがって、一の后がこれこそ実権を掌握し政治の中核にいるという報告は異国ならではのこ

とであつたのである。新帝の祖父、一の大臣の自在にふるまえる世になつたのであるが、この叙述からは一の后が前面に出ているようにしか受け取れない。それでは当の一の大臣はどうしたのか。彼はおそらく五の君を立后させるべく画策したはずである。一の大臣にとつて五の君は、「あまたが中に五にあたるむすめ、すぐれていみじうつきかしづき給」(二七〇)とか、「五にあたり侍むすめの、すぐれたる愛子に侍り。」(二七二)とあるように、最愛の娘であり、彼女が中納言を見初めた時には娘のために中納言を自邸に招いてもてなし、ために娘の恋の病が癒えたことをこのうえなく喜び、「やめさせ給へるよろこびを常に聞え給」(二七五)ほどの寵愛ぶりであった。そのような五の君が名も知れぬ深山幽谷に隠遁してしまつたのであるから、一の大臣の落胆は想像に余りあるものである。中納言は一の大臣の五の君への溺愛を想起し、急遽娘に出家された後の彼の心中へ思いを馳せたであろうし、それは同時に読者の思いでもあつたはずである。「世のまつりごとをしたまふ」の箇所にあるべき一の大臣の記されていないことや、五の君出家後の父の悲しみが忖度されることから「涙に浮き沈む」中納言の深い内面の沈鬱を読むことができるところではなからうか。

また、改まった「第三の親王」という表現を用いて伝えられた春宮即位の事実は、やがては父の転生である第三皇子が帝位に即く日もあるだろうことを期待させるものである。唐帝には男子が三人いるが、第二皇子を越えて春宮に即いているのであって、日

本で式部卿宮が独自の判断で中納言を春宮大夫に即かせるように、第三皇子もおそらく新帝の後立てをもつてやがて帝位に即く日もあるうことが読みとれるのである。

おわりに

石川徹氏は、吉野姫君腹の女兒や河陽皇后への愛執、尼姫君との生活の悩みなど、「あれを思い、これを想い、悩み煩う中納言の姿を、作者は、

○いとど掻き昏らし、魂消ゆる心地して、涙に浮き沈み給ひけり。

と一刷の筆に叙し去って、あとを読者の想像に委ねている。見事な収束というほかない。」と述べておられる。石川氏が述べられた中納言の悩みは主として女性関係について詳しく説かれたものであるが、先帝、新帝、第三皇子などへの思いもまた苦悩の根底に存在していたにちがいない。

彼岸で起こった種々の事件は中納言にとつてとり返しをつかない非嘆や感慨をもたらしたのである。

以上、本文に即して検討したところから、宰相のもたらした報告は特殊な形態で記されることにより迫真性をもって伝えられたものであり、用いられた表現自体にもしたかな配慮が施されたものであったことを確認し得たかと思われる。そして、この末尾に記された後日譚こそこれ以上発展して記述する必要のない

い、遙かな時間を中納言に抱かせるに十分な重みをもっているであり、終局にふさわしい叙述たり得たのである。

注① 『平安朝物語選要』二五二頁。

② 「更級・浜松・寝覚とその浪漫的な精神」(『国語国文』昭和十三年八月号)

③ 「国語と国文学」昭和六年四月号、のち『平安時代物語論考』に収載。

④ 日本古典文学大系による。以下、浜松の本文は本書により、頁数を記した。

⑤ 『日本の手紙』六一・六三頁。

⑥ 日本古典文学全集による。以下、源氏物語の本文は本書により、巻数と頁数を記した。

⑦ 宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引 本文編』により、表記を私に改め、頁数も本書のを記した。

⑧ 『説話文学と絵巻』一九〇・一九一頁。

⑨ 参考までに諸作品における「思しあはず」の用例数(下段)と夢との照合する用例数(上段)を示しておく。(括弧内に「思ひあはず」の場合も示した。)

竹取物語 01(01)・宇津保物語 01(01)

落窪物語 01(03)・枕草子 ナシ(01)

源氏物語 824(531)・狭衣物語 23(07)

寝覚物語 04(05)・とりかへばや物語 05(13)

栄花物語 18(01)

(『枕草子』『枕草子総索引』・源氏―『源氏物語大成』索引篇・狭衣物語―『狭衣物語彙索引』・栄花―『栄花物語全注釈』)。その他は現在刊行されている索引によった。

⑩ 松尾聡氏著『平安時代物語論考』三七六頁。

⑪ 『唐后』は何故二度転生したか―浜松中納言物語に於ける『長恨歌』の影響について―(『平安文学研究』第五十一輯)

⑫ 大槻修氏編『平安後期物語選』三六頁。

⑬ 浜松の一例(三九三頁)は日本古典文学大系頭注に引歌を仄めかされ、とりかへばやも同様である。なお『角川古語大辞典』(第一巻)には詳注があり、三項に分けて説明があり、その③として「浮き」に「憂き」をかけ、涙との縁語関係もある用法が多いことを説かれている。浜松もこの用法に近いと思われる。

⑭ 日本古典文学大系補注(九八三)。文章の構造と敬語表現からみれば「てんけん」と「御門」とが主語を表わしてい

ると解せる。「てんけん」の漢語が解明されていないま、一応平安朝和文に散見する「てんげ」を採っておきたい。なお『古語大辞典』(小学館)の「てんげ」の項に原田芳起氏による詳細な注がある。

⑮ 萩谷朴氏著『土佐日記全注釈』五七・五八頁。

⑯ 今井源衛氏著『花山院の生涯』七二頁。

⑰ ⑱に同じ。五七頁。

⑲ 『無名草子評解』一九九頁。

⑳ 『中村真一郎評論集』3 私の古典二八〇頁。

㉑ 『源氏物語』と異なる『浜松』『寝覚』『狭衣』の魅力(『文学・語学』第一〇二号)

(なかにし・けんじ 兵庫県立兵庫高等学校教諭)